

戦時下の日本YMCA『大陸事業』の評価について ——1960～70年代の言説を中心に——

遠 藤 浩

0. 序

2014年5月、筆者は貴研究会例会にて研究報告をさせていただいた。ただしその折りの報告は掲題「大陸事業」の概略スケッチであったため、内容は薄く広いもので、論文の体をなしていない。今回寄稿にさいしては、その概略スケッチ報告をそのままでなく、そこで述べたことのなかで、とりわけ「評価」にかんする部分に焦点化し記述を試みる。これの原型は、2014年3月キリスト教史学会西日本部会における研究報告であるが、このたび大幅に加筆と修正を加えた。

1. はじめに

日本のYMCAは「明治」期の創立当初より、欧米YMCAによる支援のもとその近代思想やライフスタイルを紹介する窓口、すなわち国際団体としての役割を自認していた。また20世紀初頭朝鮮人・中国人によって、それぞれの在日YMCAが東京に創設されるなどを契機として、アジア諸国ともYMCA間の交流が展開されていった。

こうして日常から国際的雰囲気と活動とを有した日本のYMCAが、戦時下の国粹的風潮にもまれながら「大陸」という国際舞台に使命遂行の場を見出し、その活路を開こうとしたのは、当時の思考に沿ってみるならば自然な成りゆきだった、と筆者には考えられる。環境はかなりちがうが、今日のYMCAにおいても、国内外で災害や紛争が起るたび、そうするのが当たり前であるように支援の方策が検討される。ある面で彼我のあいだは地続きのようでもあり、同時にある側面は断絶しているようでもある。前者を変えてはいけないもの、後者をわれわれのなかから注意深く見きわめ取り去らなければならないものだとすれば、その境界線はなにか。さらに、断ち切ってきたと確信しながら、じつはわれわれの現在にまで、持ち越してきてしまっているものがあるのではないか。あるとすれば、それはなにか。それをどうするのか。

いっぽう日本のキリスト教界人が戦時下におこなった言論や決定、行為について、アジア諸国、とりわけ韓国と中国のキリスト教界から戦後厳しい批判があった。それらを受けとめ心からなる謝罪と反省を表明、そして新たな関係の基礎におくべく発表された代表的なものが、日本基督教団総会議長名による「第二次世界大戦下における日本基督教団の戦争責任についての告白（通称：教団の戦争責任告白）」（1967年、以下「戦責告白」と略記する）であった。

本稿では、「大陸事業」の戦後における評価を検討する。そのさいおもに「戦責告白」と前後する時期における、日本のYMCA関係者による「大陸事業評価」を中心にみてゆく。

これらをみてゆく意義を、筆者は以下のように考えている。戦後さまざまになされてきた戦時の評価とは、現今のわれわれに直結する「歴史認識」の問題であるとともに、「戦後史」の範疇の事柄でもある。直結するというばあいそのひとつの意味は、今回中心的にみる60～70年代の議論をとおり形成されてきたレンズを、われわれは所与のごとくそのままにして戦時を見ているところがある、ということである。その是非をいうのでなく、また自明視するのでもなく、この所与のごとくあるレンズをも、「戦後史」として客観的に観察するステップを踏むべきでないかというのが、筆者の最初の問題意識であった。60～70年代には巨大な研究テーマとなりうるものが山積みであり、筆者の力量にあまる。ゆえに、あくまで戦時下の「大陸事業」へのアプローチの一環、という範囲を出て深く入りこむことはできないながら、この時代を飛び越え直接的にだけ戦時に切り込むというのでは、多くのものを取りこぼすことにならないか——とりわけ歴史家自身の自己客観化において——と考えたのである。

なお、日本YMCA「大陸事業」を中心的に扱った「先行研究」と呼べるものは、筆者の菅見のとりわけ狭さにも由来するかもしれないが、星野宗吾論文「日中戦争とYMCA大陸事業」（1975年）と、池田鮮の同「日本YMCAの大陸事業における奈良傳と末包敏夫」

（2005年）ぐらいしかない。ほかは評価を含む「言説」や「言及」のレベルにとどまっている。ただいずれにせよ、戦時評価の戦後言説をあらためて問いなおす、という形の「大陸事業」へのアプローチはこれまでになかった、ということだけは指摘しておいてよさそうなのである。

こうして戦前という過去と、戦後という過去を客観化の俎上に同時にのせてゆくことで、現在とのつながりと断絶とが、われわれの歴史認識の構造が、より立体的に、明らかにみえてくるのではないか。そのことがわれわれの現在における行動、実践、運動にたいして重要な示唆、あるいは根拠をもたらすのではないか。そのように考えたのである。

*以下の文中、現在も存命で活躍中の方もおられるが、距離感を等しくするため、すべて敬称略で記述させていただいた。

*煩雑さを避けるため、「」に入れた引用文には脚注を付したが、文意を筆者が要約した箇所には脚注を付けなかった。前後の脈絡で、何を要約しているかは分っていたと思う。

2. 1960～70年代における「大陸事業」評価

2-1. 「大陸事業」に言及した、YMCA主事による著作

この項では、YMCA主事2人による、それぞれの著作をとり上げる。それらは「大陸事業」だけを扱ったものではないが、戦時の叙述に多くを割いているからである。ひとつめは奈良常五郎¹『日本YMCA史』（1959年）、いまひとつは海老沢義道『斎藤惣一とYMCA』

¹ ならつねごろう。1909（明治43）-1986 東大YMCA出身のYMCA主事。前橋市出身。34年

(1965年)である。

2-1-①奈良常五郎『日本YMCA史』(1959年)より

日本YMCAの通史を最初にまとめたのは、奈良常五郎だった。これは、その叙述が東京YMCA創立(1880年)より以前の「明治」期初頭に始まり、日本YMCA同盟50周年の1953年にまで及んでいる大著だが、ここでは戦時下の章(「危機の時代——1933-1945——」²と題されている)、それも日本YMCAの戦時対応にたいする評価的な記述だけをみよう。あらかじめ留意しておきたいのは、かれが戦時下「大陸事業」に直接従事した当事者だったということであり、叙述は歴史的検証よりも思いや願いの表白という面が強く感じられる。

まず「大陸事業」にものちに影響することになる「全国的統制の強化」³について、奈良は一つの項をあてて記している。それによれば、統制が提唱されたのは、1933年の『開拓者』⁴においてであった。井深梶之助ら全国の指導者約40人が今後のYMCAへの提言をするなか、多数の者が「統制」、「中央集権」⁵について言及したという。奈良は「独立自治の各個YMCAが各々完全な独立性を保ち」、「共通目的のために『同盟』している現行の同盟組織」⁶が、「長所として働く時代ではなくなった」⁷とする。そしてそれは、YMCA自体よりあくまで外部の強い要請だったとし、「すべてが国家的統制の鎖にしばられ自由を失いつつあった時、YMCAもまたその鉄鎖から遁れることはできなかった」⁸という。とはいえ、『開拓者』上の意見には、自由を失う時代の苦悩とともに、それをはじき飛ばすかのような勢いで「打って一丸」⁹を高調する、意気軒昂さも同居していた。そこでは遁れることができない受動性というよりむしろ、時代の閉塞感のうちに胎動する新たな機運をとらえ、突破してゆこうとする能動性のほうが色濃い、と筆者には思われるのである。だがここでの奈良は、以降のYMCA内の統制的動きをただ淡々と具体的に列挙していくだけである。

いっぽう奈良は、「ナショナリズムの波に抗して」¹⁰の項では、国粹的風潮が強まるなかでもYMCAが「正しい国際性を保とうと努力した」¹¹とし、この時期開催された国際会議を

大学卒業後、日本YMCA同盟に入職、SCM後の学生YMCA建て直ちに尽力した。42-43年香港に駐在し広東YMCAの働きを助け、合せて南京朝天医院に結実する学Yの中国医療活動をサポートした。44年応召、満洲で従軍し、敗戦後4年間シベリアに抑留された。引揚後は同盟主事、広島Y、神戸Y、大阪Yで総主事を歴任、70年からはJOCS最初の専任総主事。寡黙で温和、文筆の人だった。(『YMCA人物事典』日本YMCA同盟、2013年、167-168頁を参照)

² 奈良『日本YMCA史』日本YMCA同盟、1959年、301～345頁。

³ 同上、306～307頁。

⁴ 日本YMCA同盟機関紙。ほぼ月刊。1906(明治39)年2月創刊、1944年3月号で終刊。1946年9月復刊され当初は年4回、その後月刊とするが経営問題から56年12月号をもって発行停止した。通算51巻524号を数えた。YMCA内に止まらない超教派的キリスト教思想言論の史料としても貴重。

⁵ 奈良『日本YMCA史』前掲、306頁。

⁶ 同上、307頁。

⁷ 同上。

⁸ 同上、307頁。

⁹ 同上、306頁。『開拓者』1933年2月号記述の孫引き。

¹⁰ 同上、324～326頁。

¹¹ 同上、325頁。

列挙、次のように述べる。参加した日本人は各国代表とのあいだに「越え難い溝を発見」¹²したが、「人間の不可能を越えて、それらの相違と対立を、神の側から打破る愛と和らぎの力が真剣に祈り求められ」¹³、次項でも国際的友情の事実とともに「戦争は国と国とを割いた。しかし両国YMCA人の心の中には、この友好の火は消されることはなかった」¹⁴。このような考え方は、現代YMCA人にもひとしく体験的に共感できるところではあり、「大陸事業」推進者たちも同様に、国を越え信仰にある友情を信じて挺身しただろうことは、事柄の一面として疑いえないところではあろう。その態度を甘いとするか否かは、そのまま現在への問いともなりうるだろう。

1931年の満洲事変以降、日本のYMCAは満洲にあった各国YMCAにたいする、責任意識と影響力を強めていく。奈良はそれを「時局の推移に伴って日本のYMCAに課された実際的な義務であった」と述べる。これをどう読むか。また1937年の盧溝橋事件に端を発した日中全面戦争開戦以降、日本のYMCAは「軍隊慰問事業」を主とする「時局特別事業」、そして「大陸事業」を主とする「東亜青年協力事業」を展開してゆく。奈良は前者について、日露戦争以来先人たちの経験が「日本のYMCAをしてほとんど躊躇なしに戦野に労苦する青年たちのための慰問事業に手をつけしめた」¹⁵とし、後者については、大陸各地のYMCAはじめキリスト教界が「日本軍政の暴圧下に苦しんだ。それを保護して非常の事態下にYMCA本来の活動を持続しうる可能性を保持するためには、日本のYMCAが進出して協力の手を差し伸べるよりほかに良い途がなかった」¹⁶と述べている。現在のYMCA人も、災害や戦災に苦しむ人々のもとへ必要とあらば赴くのであり、当時の实际的側面だけをみればそれが日本人主事でなければならない要件が、日本軍政下におかれた中国大都市ではとりわけ大きかった、ということもいえるだろう。苦悩する青年とともに、を使命としてきたYMCAが若い兵士を慰めようとする、いっぽうでその日本軍から苦難をこうむる人々に手を差し伸べようとする、一見すれば矛盾する二つの事柄には、当時としては矛盾しない一本の一どちらでもないYMCA固有の一理路がある、と考えられたであろう。筆者がこのように述べるのは、それを肯定するためではなく、まさに戦時下の大陸を経験した奈良が述べるそのことを、胸中の事実としてつかまえようとするためである。そこに、現在われわれ自身の現実をどうみるのか、何に力点をおいてゆくのか、を考える契機が存するからでもある。

奈良はこの章の終わり近くで「大陸事業」において、自らを含む派遣駐在員となった主事をはじめとする当時のYMCA人が、「軍部の行動に不信と不安を覚えながら、自ら『大東亜建設』の良心となろうと決意」¹⁷し、「多くの困難と不便や誤解にも拘わらず、『軍属』の資格や軍人の待遇を受けることを拒みいわゆる『丸腰』ではたらき、現地の庶民と労苦を

¹² 同上、326頁。

¹³ 同上。

¹⁴ 同上、327頁。

¹⁵ 同上、332頁。

¹⁶ 同上、335頁。

¹⁷ 同上、335頁。

共にした」¹⁸と総括している。

以上みてきた通り奈良には、全体として大陸に共通体験をもつ者の共感と、YMCA本来の使命感を強くもつ者の自負とから、「大陸事業」をはじめとする日本YMCAの戦時対応を肯定的に評価する傾きがあった。そこに戦時下の現実を生きた人物の、事実としての内面の真実もまた存したことを、われわれは読みとらねばならないだろう。「危機の時代」の章のまとめとして、奈良はこのようにもいう。「その歩みには正しきもあり、誤まれるもあったろう。しかし精一杯の歩みであったことを悔いる者はいない。すべては戦火によって裁かれた。滅ぶべきものは滅び、生きのびるものは生きのびるであろう。」¹⁹——戦時下に信仰により国際的友好をねがう使命に生きようとした人の言葉と行為とを、われわれは全否定できないし、すべきでもないだろう。とりわけ最後の一節は哲学的であり、何を存続させつつ何を滅ぼさねばならないか、の問いを含んでいると思われる。それは現在を生きるわれわれにとっても、われわれ自身へ問いかけねばならない問いではなかろうか。

2-1-②海老澤義道『斎藤惣一²⁰とYMCA』（1965年）より

「まえがき」において海老澤義道は、本書を「主観のはいらないものはおもしろくない」²¹という知人の言葉に励まされ、「大いに主観もいれて」「物語りふう」²²書いたもので、伝記ではなく歴史でもないと断っている。それにより、かえってわれわれにとっては、60年代のYMCA主事の1人が、ここではとくに戦時下の日本YMCAの営みについてどう評価していたのかが、はっきりと示されることとなった。

海老澤もまた、戦時下のYMCAについて一章を割いている。斎藤惣一を中心にではあるが、「大陸事業」についてはむしろ、奈良の著作よりも多くの事実を掘り起こしている。ここでもやはりその事実関係よりも、かれがそれらをどう評価したかを中心にみよう。

「日中戦争と時局特別事業」²³の項で、「『青年のゆくところ常にYMCAもともにあり』との先人の遺訓を体して奉仕」²⁴するため慰問班派遣を決定した、という表現がある。また「海外世論の是正と鮮満部会」²⁵の項では、北米との絆を重視する斎藤惣一が37年訪米、J.R.モットをはじめとする北米教界人との友情をいっそう深め、日本の立場を説き反日感情を和らげようとした働きを報告。「戦争阻止には役立ちえなかったとしても」、「かわらぬ友情を強め」、「漫然と時流に流されていなかった」²⁶と肯定的にとらえている。現在も

¹⁸ 同上、336頁。

¹⁹ 同上、302頁。

²⁰ さいとうそういち。1986(明治19)-1960 戦前、戦中、戦後の30年にわたる日本YMCA同盟総主事。福岡県小倉出身。1911年東京帝大卒後、母校第五高等学校講師、教授となる。17年協力主事フィッシャーの懇請に応じ日本Y同盟主事、21年総主事。24年関東大震災後の東京Y再建のため、東京Y総主事として転出。33年同盟総主事に復帰。戦時下の困難な舵取りを担う。敗戦後46年政府の懇請によりYを退職し50年まで引揚援護庁長官。Yに復帰し56年引退まで総主事。

²¹ 海老澤義道『斎藤惣一とYMCA』日本YMCA同盟、1965年、5頁。

²² 同上。

²³ 同上、131～134頁。

²⁴ 同上、132頁。

²⁵ 同上、134～136頁。

²⁶ 同上、136頁。

YMCAは「友だちのいる国と戦争なんかできない」²⁷から国際的にも「隣人愛」²⁸を育てる活動を推進するという。しかし、国家が巨大な暴力で動きだしたとき、個人の友情がそれを阻止できる可能性があるというのは幻想であろうし、海老澤の叙述もそれを認める形である。また、大小のこうした海外世論是正の取り組みは各個YMCAでもみられたが、海老澤の叙述でみる限り、斉藤を含め全体に日本側の立場説明・説得が中心目的で、海外の批判に耳を傾ける方向性はほとんどなかったのである²⁹。

「大陸事業」については、広東・北京・南京・上海の4地域ごとに項をたて約17頁を割り報告している。最後の「大陸事業の意義」³⁰の項は、海老澤の総括である。それは「第一に、日本人キリスト者としての贖罪と愛の奉仕」、「第二は交戦国民共同の超民族的YMCAという、他に類をみない経験」、「第三に日本軍勢力の背景を利用せず、その時代では他に例をみない平和主義的進出」、「第四に現地にあったひとびとを今日の（戦後の／筆者）指導者として獲得（あるいは温存／筆者）」³¹と、4つの意義に集約されている。

その評価には、YMCA人としての心中の真実があったことは認められるにしても、抑制的で冷静な総合的検証をする姿勢に不足がある、と思われる。とりわけ、管見の及ぶところ「（中国民衆への）贖罪」という言辞は、日中戦真ただなかの日本のYMCAで使われた痕跡はなく、戦後の回顧的言説のなかだけにみられる、ということは指摘しておく必要がある。文書検閲の厳しい情勢下、ほんとうのことは書けない事態だったろうことは容易に理解されるとはいえ、一次史料にないことを断言するというのでは、歴史に向かう態度とはいえないのである。また、4番目の意義に象徴的にあらわれている、日本YMCA内の組織論理を普遍的価値と直結、ないし混在させてしまうところは、他にも散見される海老澤らYMCA内部の人間の特徴といえよう。

このように、筆者自身が「大いに主観を」と述べるとおりのものが前面に出てきており、それらを強く動機づけているのは、かれ自身がともに働いた先輩主事たちへの共感と敬意にほかならない、と考えられる。共感と尊敬を払いつつ、しかし批判的にみてゆく態度を歴史化する態度とするならば、人物を直接に知る世代が、また筆者自身もそれだが、同じ共同体にある者が当の共同体を歴史化することの困難さに、思いが至らせられる。ともあれ、海老澤の意図は歴史ではなく、おそらく当事者の記憶や願いを一まだ生なましいうちに一つなぎとめておくこと一つまり歴史化する前の資料を遺すこと一だったのではなかろうか。

このことに起因する、当書の戦時下についての記述が、YMCAにとりさしあたったの「他者」といってよい、あるキリスト者からの批判的問いを呼び込むことになった。そのことを次節で紹介し、検討したい。

2-2. YMCA機関紙など

²⁷ 『YMCAオリエンテーションシリーズ4

——わたしたちは、こう考えます——』日本YMCA研究所、1987年、31頁。

²⁸ 同上、33頁。

²⁹ 当時の『開拓者』など一次史料からも、そのことは証拠だてられる。

³⁰ 海老澤『斉藤惣一とYMCA』前掲、153～156頁。

³¹ （「第一」～「第四」までをまとめて）同上、153～154頁。

「戦責告白」が出された前後には、戦時下における日本キリスト教界の態度や言行につき、批判的に検証しようとする機運が高まっていた。「大陸事業」もその例にもれなかった。

この項では、第一に65年YMCA機関紙に掲載された、高戸要（当時『月刊キリスト』³²編集長）からの問いかけと、YMCA側からの応答をとりあげる。重要なチャレンジであったことは間違いなく、どう応答しようとしたかに戦後YMCAの歩みも垣間みえると考える。第二に、『福音と世界』³³67年8月号掲載の「座談会／戦時下中国のキリスト教と日本」³⁴から、日本のYMCAについての部分を検討したい。この号の発刊は「戦責告白」発表直後のことだった。そのため「戦責告白」の論議や草案作りと座談会の企画とは同時進行していた、と推察しうる。

2-2-①機関紙『YMCA』の、誌上討論（1965年）から

発端は、前節でとり上げた海老澤の著作を読み疑問に感じた高戸が、日本YMCA同盟機関紙65年9月号に「書評」の体裁ながら、実際は公開質問状であるような寄稿をしたことであった。それはたちまちのうちに全国のYMCAで波紋を呼び、10月号には「大陸事業」の現地駐在員の1人でYMCA主事にして歴史家でもある奈良常五郎が反論を寄せる。つづいて11月号では当時東京YMCAの若手主事だった斉藤實³⁵が、別な角度から議論を展開させた。そうして12月号が、高戸を含む関係者を集めての座談会の議論を掲載した。

高戸の質問は3点あり、筆者なりに要約をすれば、①YMCAと教会との関係、②戦時下のYMCA事業と日本帝国主義との関係、③（「明治」期のキリスト者像を受け継ぐ斉藤惣一らの）日本皇室尊崇の愛国心と米国偏重の国際主義の今後、以上をどのようにとらえているかを問い、「かけがえのない記録から、批判的摂取を一『斉藤惣一とYMCA』を読んで—」³⁶という標題が付されていた。以下では②への応答を中心に、やりとりをみてゆく。

これを遡る6年前すでに『日本YMCA史』をものしていた奈良常五郎は、すぐさま次号に「わたしたちは戦争の不幸にいどんだ」³⁷と題する反論を寄せた。奈良は「もちろん-略-批判され反省されるべき」³⁸としながら、もし批判者が「真剣にはたらいだ者たちが-略-戦争

³² げっかんキリスト。キリスト教伝道雑誌。1959年12月『ニュー・エイジ』を改題し日本基督教協議会文書事業部が発行。発行人浜崎次郎、編集人高戸要。できるだけキリスト教用語を用いず、生活に根差した従来にない新しい企画で、読みやすい福音的雑誌を目指した。66年発行所を教文館に移し73年『びーいん』と改題。同年12月終刊。（『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、487頁を参照）

³³ ふくいんとせかい。戦後の日本キリスト教を代表する神学評論誌。新教出版社が46年から発行した『キリスト教文化』と『福音と時代』を統合し52年4月創刊。日本キリスト教団を中心に教会形成と革新の課題を追究、世界教會的・アジア的視野を広げ教会の戦争責任の自覚とともに平和問題、靖国神社問題、韓国キリスト者の民主化闘争など、日本の教会の政治的・社会的参与の道を常に提示し続けている。（『日本キリスト教歴史大事典』前掲、1204頁参照）

³⁴ 『福音と世界』1967年8月号、新教出版社、34～46頁。

³⁵ さいとうみのる。『東京基督教青年会百年史』を1979年に著した。現「YMCA史学会」理事長、元東京YMCA副総主事。

³⁶ 『YMCA』1965年9月号、日本YMCA同盟、8頁。

³⁷ 同上1965年10月号、8頁。

³⁸ 同上。

の拡大をはかるひとびとのために尾をふって追従した」³⁹というならば、それは「見当違いである」⁴⁰。そして斉藤惣一らは現に「批評家たちよりも略・実質的に高く評価されるべき努力をつみ重ね」⁴¹たと主張。さらに「戦時事業はその悩みと苦しみと祈りのなかから生れてきたもの」⁴²で、「当事者の100%の満足と無反省のなかでおこなわれたものでもない」⁴³こと、「いたましい現実泣き、非力を嘆きながら、ただ誠実をつくした」⁴⁴ことを、当事者の1人として強く訴えたのである。そして「YMCAがあのようなことをしなければならなかった歴史を、謳歌する者は、当事者のなかにひとりもない」⁴⁵と苦難の同労者たちを慮っている。

斉藤實は、むしろ視点を現在におき、斉藤惣一ら個人がYMCAである時代から、組織的YMCAの時代へ転換したとし、そのなかで今後のYMCAを構想する「“作家“たちの1人」⁴⁶である自身を問うている。評論家ではない、これから新たなYMCAを創っていく責任主体は、行動（と組織とプログラム）をとおり応答しなければならないし、自分はそうするつもりだ、と決意を述べる。ただそのための必要性とは裏腹に、過去の総括が日本YMCA全般に不十分だとし、具体的には「大陸事業」推進者の先輩主事たちから、戦後20数年をへた時点まで総括的評価が出されていない現状に、疑問を投げかけている。さらには、その作業はひとりYMCA人だけで済ませる類のことではなく、むしろ個人だけが問われるのでもなく「答える者の群れと、きびしく見守る者の群れとの定期的対話の機会」⁴⁷をと他者を含む集団で総括してゆく必要性を述べ、締めくくっている。

座談会記事⁴⁸は、A3版の紙面見開き2頁にびっしりやりとりが掲載され、上述の奈良・斉藤もそうであったが、もはや書評とそれへの評論の域を越えて、過去・現在・未来におけるYMCA論の様相を呈した。座談会出席者は高戸と、池田鮮⁴⁹ら同盟主事2人と斉藤實ら東京YMCA主事2人の計5人。議論は多面にわたったので詳述を避け、以下は戦時下と「いま」（65年当時の／筆者）にかんする意見だけを拾いたい。かなり率直な議論も出てくる。

まず高戸は、過去を問題にするだけならば興味はないと述べる。過去の責任を受けとめ現在から未来のYMCAをどうするのか、突きつめればこれからどう生きるのか、そのために

³⁹ 同上。

⁴⁰ 同上。

⁴¹ 同上。

⁴² 同上。

⁴³ 同上。

⁴⁴ 同上。

⁴⁵ 同上。

⁴⁶ 同上1965年11月号、8頁。

⁴⁷ 同上。

⁴⁸ 同上1965年12月号、4～5頁。

⁴⁹ いけだあらた。1912(明治45)-2012 朝鮮で生れる。父親は憲兵隊長。青山学院神学部卒。卒業後すぐ中国伝道を志し北京の清水安三のもとへ。そこで北京日本YMCA設立準備中の奈良傳と出会い、YMCAに現地採用される。北京と上海で働き44年応召。戦後復員し同盟、札幌Yをへて61年同盟総主事となる。64年同盟総主事として戦後初めて韓国のYMCAを訪問、35年間の植民地支配を詫び赦しを乞うた。YMCA退職後、東海大相模高校校長。96年「YMCA史学会」を創立、初代理事長に就任。

歴史をみるのだという態度を表明し、とくに戦争の被害・加害の問題について、YMCAがあいまいにしていないかを問うた。池田、斉藤らはまず総括が不徹底であると答え、構造的に日本YMCAが加害者であったという議論がYMCA内でひじょうに少なく、再検証が必要との意見も出された。また戦時下において国策と一般的風潮にはたしかに批判精神をもちながら、国家全体の行き方にたいし日本社会の非主流派であるキリスト者は責任意識に甘さがあった、という自己批判が述べられた。それと同じ意味で、現時点（65年当時／筆者）も「問われている」、「われわれの問題として」⁵⁰という意見も出されている。

また戦時にはもっとも若い主事として北京・上海に働いた池田は、斉藤惣一らが戦時下に何をどう意図していたか十分共有できぬまま、不納得のまま現地で働いたことを、率直に述べている。さらに、斉藤ら戦時のYMCA指導層らが、じつは戦後まで見越し流されるふりをして、大陸で国際協力の実をとろうと願ったのではないかと推測する。「斉藤先生の気持ちのなかには、反対のものがあつた」⁵¹が、「表面にあらわれたものから見ると、みずから流された、といえる」⁵²と述べている。

また、これまでの北米偏重から今後はアジア・アフリカとの関係をどのようにしていくのか、高戸から問われると、池田はそれをまさにいま準備中だと応じ、具体化への意欲を示した⁵³。

総じて高戸の意図は汲まれ、歴史批判をとおして、現在から未来のあり方を模索する座談会となった。しかしながら、個々の意見表明に終っており、この後も日本のYMCAにおいて集団として総括がなされた形跡は、じつのところない。いみじくも、座談参加者の1人は「対社会的な統一した姿勢をもちえる団体」⁵⁴なのかどうか「はっきりしない」⁵⁵と述べている。斉藤實が述べた「個人」の時代、「組織」の時代の論、また前々項でみた奈良常五郎著作からも窺えるのは、統制的、画一的な思想と実践は、それが国策追従であれ反国家的であれ、いずれかへの統一がYMCAには元来馴染まないのではないかと、ということである。そのため強固な一枚岩で戦時下に抵抗することが出来ず「流される」要因となり、いっぽうでまとまった戦後の総括につながらない要因ともなった。と同時に、統制されない末端では個々の裁量により、現地のニーズに合わせた個別の実践も可能となっていた、ともいうことが出来るのではなかろうか。当事者の奈良が、かなりの自信をもって国際友好の実をあげたという切るのは、かれのそうした内心の願いを少なくともある程度は、実践的に充足させる現場があつたのだろう。

座談の終盤に述べられたアジアの途上国にあるYMCAとの関係について述べれば、全国の各個YMCAが70年代以降個別に相手方を探し、各個YMCA同士で兄弟姉妹YMCA関係を結び、国際交流また協力関係を発展させていったことは、指摘しておいてよいだろう。それは統一的動きではなかったが、各個YMCAの判断のもと大きなうねりとなった。歴史から

⁵⁰ 『YMCA』65年12月号、5頁。

⁵¹ 同上。

⁵² 同上。

⁵³ 同上。

⁵⁴ 同上、5頁。

⁵⁵ 同上。

の批判的継承という意図をもつとき、戦時統制と戦時事業への批判精神を「プログラムで語る」ことを意図した、真っ当で自律的な動きであったとも考えられる。ただし、戦後の国際事業についての具体的検討は当論の目的ではないので、これ以上は立ち入らない。

2-2-②『福音と世界』（1967年8月号）誌上の座談会から

座談会「戦時下中国のキリスト教と日本」は、教団の「戦責告白」からわずか1か月後『福音と世界』8月号に掲載された。座談者は日本YMCA同盟主事（当時）末包敏夫⁵⁶、日本海外宣教会理事（当時）の大森三郎、そして聖和教会牧師（当時）の向井芳朗の3人で、それぞれが戦時下の中国大陆での活動経験を有した。かれらの証言を残したという意味で、貴重な史料といえる。

ここでは当然ながら、末包の証言だけをとりあげる。

座談中で基本的に末包も、戦時の胸中にあった思いをことさら強調しているようにみえる。「東亜新秩序なんていうことは信用しなかった」⁵⁷などであるが、かれが実際には「大陸事業」を始めるにあたり「東亜青年協力運動」を高唱するYMCA内の中心人物であったことは、別稿で指摘した⁵⁸。また当事者の自負であろうか、中国のYMCAや人々にたいする自身の貢献が話題の中心となっており、事業を社会的に位置づけることにはやや不足があるようにみえる。ただし組織よりも個人がYMCAだったという論理に従えば、南京と上海ではまさに末包がやったことが日本YMCAがやったことだったのである。その意味で、以下に紹介する証言はたいへん示唆にとんでいる。

1957年の再訪中時を回顧した述懐である。中国YMCA側からの「『末包個人のパーソナリティおよび意図、方向については、信頼し、感謝している。しかし、末包がやったことの客観的な意義は、やはり軍の占領体制を造り上げることを助けたことになっている』」⁵⁹、という批判を受けてのやりとりと述べるくだりである。末包は反論し「『そういうことはもう初歩的な、分りきったことだ、日本人として私が占領下に呼ばれて来た以上、それは当然のことだった』」⁶⁰と返した、と語っている。だれに呼ばれたのかは問題だが、いまそれはおいておこう。末包が「初歩的な」、「当然の」ということが出来たのは、かれ自身が20～30年代に社会主義的な思想をくぐった来歴をもつ人物だったからであり、帝国主義的侵略という概念を「大陸事業」当時から少なくとも頭では了解していたからであった。

その意味は、末包自身が反論する意図をもちながらも、占領下で侵略側の人間が被侵略側

⁵⁶ すえかねとしお。1897（明治30）-1991 香川県出身。21年同志社卒業後、神戸YMCAに入職、31年京都YMCAへ移る。中島重の影響で学生時代から社会主義的思想を懐き、キリスト教信仰と社会との接点での取組みを追求、社会的基督教徒関西連盟結成（31年、京都Yにて）に積極参画。39～45年南京と上海で「大陸事業」駐在員として働く。47年帰国。同盟勤務のあと、広島Y、横浜Yで総主事を歴任した。

⁵⁷ 『福音と世界』前掲、35頁。

⁵⁸ 筆者拙稿「1920～30年代二つのSCMとYMCA——日本YMCA「大陸事業」と「東亜」論との関連を焦点として——」、『キリスト教社会問題研究』同志社大学人文科学研究所、第63号、2014年12月所載論文。

⁵⁹ 『福音と世界』前掲、45頁。

⁶⁰ 同上。

を助けようとする事の限界をいみじくも認めてしまう格好になった、ということである。が続けて「『私と協力したことで、あなたの方で戦犯になり、批判された者があるか』」⁶¹と、暗に実際上の役には立っただろうと訴え、切り返したことを回顧している。しかし次のようにも語っている。「私たちはあの当時、結局招かれざる客だった」⁶²。またさらに言葉をついで「しかし、心ある人は手をのべて、私たちがキリスト者としてやったことを理解してくれたはず」⁶³とも語る。「しかし」や「が」でつなぐ話しが多くなり、頭での理解と思いや願いとが矛盾し、整理しきれない様子が伝わってくる。

いみじくも座談の最後に末包は、こういつて締めくくった。「われわれはその矛盾をかかえながら中国で夢中になって働いた」と。矛盾は、戦時下も座談時にも解決しないままかれの胸中にあった、と感ぜられる。それは国家、社会、組織、それらと個人間の矛盾の問題でもあっただろう。選択肢を奪われてしまったあとで個人において最善を尽くそうとしても、組み込まれた枠ごと評価されざるをえないのだ。末包は、その最大の動機はなお不明だが、この矛盾を承知で出かけていった1人だったと筆者はみている。そこで筆者の末包にたいし抱く疑問とは、のちの歴史的評価と自身の思いとの矛盾を止揚し、自らのうちに再定位させることができたのだろうか、ということなのである。この点については、戦後資料のさらなる調査発掘が必要になる。

2-3. 星野宗吾『日中戦争とYMCA大陸事業』（1975年）より

その後もさまざまな評価や言及がなされたが、それらの内容とは別に留意しなければならないのは、既述のとおりYMCA内で出された個々の意見や議論が、教団の「戦責告白」に相当する日本のYMCA総体としての総括表明にはつながらなかった、ということである。それは「評論より実践」という、いっぽうのYMCA文化が前に出たことで、「プログラムによって語る」方向性がとくに意識された結果という面があったことと、組織の時代を迎えたとはいえ、やはり画一化されない組織風土であったことは、すでにみることが出来たと考える。また、そこから中韓をはじめとする、アジア諸国の各個YMCAとの関係再構築が、個別的かつ実践的にはかられる契機となっていたこともすでに述べたが、総括の甘さが、実践上のほころびにはつながらなかったのか—以下でみる星野論文は、その点をついたものであった。

さて、70年代の国際関係の活発化を背景に、再度その原点のひとつである「大陸事業」を見直そうとする人物が、内部からあらわれたわけだが、それが星野宗吾という主事であった。30代のかれは与えられたリカレント研修の期間を、この歴史をたどることにあてた。かれが掘り起した新たな事実関係もあったが、それを紹介することが本稿の趣旨ではないので、ここでもやはり、その評価を聞こう。

星野はまず、日本YMCAが指導力を大陸へ振り向けたことで、戦後復興のための人物を失うことなく獲得・温存したという評価には、次のように異議をはさんでいる。「リーダー

⁶¹ 同上。

⁶² 同上。

⁶³ 同上。

シップの温存は、大陸事業の結果ではあっても、目的ではなかったはずである。YMCAという一組織の温存のために、大陸事業がなされたとするなら本末転倒である」⁶⁴と。また「そうであるなら、我々は日本という国の存立のためという大義名分で中国を侵略した理論と、共通の基盤をもっていることになる」⁶⁵と。けだし正論であろう。他者を自己都合のため利用した、ということになるからである。

終盤に星野も、論文執筆の「現在」をその評価へ大きく反映させている。というのは当時、ベトナム戦争の難民救済事業へ日本YMCA同盟から2人の主事が派遣された⁶⁶からだ。かれは論文中そのことへ言及、南ベトナム政権を通して現地へ入ったことにたいし批判的考察を記している。その主要な論点は、侵略者側を見きわめそちら側に立つなということであり、ベトナム戦争の事態と日本YMCAの対応が、星野をして「大陸事業」の歴史研究へ向寄せたのだろう、とここで推察されうる。かれにも過去から現在を問い質す姿勢があったといえるのだが、論文の終盤はその姿勢が前面へ出すぎ「大陸事業」の歴史評価というより現在とすべき方策のほうへ、大きくそれていく。それは、歴史研究としては課題を残したともいえるが、かれの問題意識と歴史へ向う態度からは、学び継承すべきところが大きいにあると筆者は考える。

3. 1980年代における「大陸事業」評価

80年代には、大都市YMCAが相次いで100周年を祝った。合せて、それぞれが100年史を著した。「大陸事業」について言及があるものもないものもあるなか、60～70年代の議論は、どのように引き継がれたのだろうか。ここでは『横浜YMCA100年史』（1984年）と、とくに「大陸事業」に多くを割いている神戸YMCAの『神戸とYMCA百年』（1987年）とを、ひもといてみよう。（以下ここでは本文中YMCAをYと略す）

3-1. 『横浜YMCA百年史』（1984年）より

横浜Yのほうは、「時局特別事業」⁶⁷と「国内戦時体制の強化」⁶⁸、「対中国文化工作とYMCA」⁶⁹の3節にわたって、Yの大陸進出を記している。そこでは、とりわけ奈良『日本YMCA史』にある「大東亜の良心」⁷⁰という言葉と40年改定の「日本基督教青年会会員綱領」⁷¹とを対照させ、「良心」の「内容が何であつたかという疑問を持たざるを得ない」⁷²とし

⁶⁴ 星野『日中戦争とYMCA大陸事業』1975年、121頁（400字詰原稿用紙）。

⁶⁵ 同上。

⁶⁶ 大阪YMCA主事・宮崎幸雄と富山YMCA総主事・山下政一が、1970年から相次いで南ベトナムに入り、サイゴンを中心に難民救援事業に就いた。星野の論文執筆は業務の傍ら少しずつ進められたので、論文完成提出時期と2人のベトナムでの任期のあいだにはかなりの懸隔がある。

⁶⁷ 『横浜YMCA百年史』1984年、276～285頁。

⁶⁸ 同上、288～289頁。

⁶⁹ 同上、289～290頁。

⁷⁰ 既出、脚注17を参照。

⁷¹ 国内外の情勢をうけ、38年より検討された。その要点は「基督の精神」を後退させ、「皇室」「国体」「皇国」を前面に、会の最大目的を「忠良ナル皇国臣民トシテ奉公」することへと転換したことである。

⁷² 『横浜YMCA百年史』前掲、289頁。

て、奈良の主張を斥けていることが、注目されるだろう。また「指導者の温存」論を、
「YMCA主事を戦争中に国外に一時難を避けて逃避せしめ、戦後に帰国して日本のYMCA
再建に大きな力となったという皮肉な見方も」⁷³ある、というふうで紹介していることも目
をひく。「大陸事業」とせず、「対中国文化工作」としていることにも、編者の立場があら
われている、といえよう。

3-2『神戸とYMCA百年』（1987年）より

神戸Yのほうはどうであろうか。他の100年史にない指摘は、Yにおける中国進出各種事
業の「国際性」の背景に「反共」意識があった、という指摘である。そうしてその源流を
「反共」をうたった「反革命干渉戦争」⁷⁴であったシベリア戦役時にも、日本のYが軍隊慰
問班をさし向けたことにまで、遡及させている。「日清・日露戦争以来の慰問事業の『国際
性』は、シベリア出兵以来ははっきりと『反共』の色彩を帯びてきた」⁷⁵と。

以下、そのほかの評価とおぼしき記述を並べてみよう。

「忠良な臣民」でありつつ「愛と祈りのクリスチャン」であり、「良民」を救うことに
使命感を感じて「聖戦」に協力し、大陸事業に献身的に働くということは、あまりにも無邪
気な行動であり—後略—⁷⁶

およそ侵略戦争に真の福音の宣布がともないえないことは自明の利(マ)である。同じこ
とは青年協力事業にもいえる。およそ侵略の進展にともなう真に友好的な協力事業などあ
りうるはずがない。たしかにYMCAの「東亜青年協力事業」は、日本の帝国主義のお先
棒をかつぐ意図ではじめられたものではないであろう。むしろ、それへの罪滅ぼし的な意
図もなきにしもあらずであったようだ。だがしかし、その意図がいかに高潔であったとし
ても、しょせんそれは軍部の侵略政策を糊塗する道具の役割を演ずることを運命づけられ
ていた—後略—⁷⁷

60～70年代の議論をへて80年代に到達した、これはもっとも妥当な評価ではないだろう
か。もはやこの上に付け加えることはないかに思われる。しかしながら、筆者があえてこの
先へ進もうとするのは、歴史がつねに「現在」のものだと認識するからだ。これが書かれた
のは80年代、平和と右肩上がりの成長が続き、YMCAもますます繁栄すると信じられてい
た。もはや戦後ではなく、ましてや戦前であるはずのない時代であった。戦時の事柄は過去
であり「他者」の事柄として評定できたのではないだろうか。また末包のいう「矛盾」を、
歴史家のなかから解決済みとして捨象しているようにも思われる。

筆者には、60～70年代にはさまざまな要因から、矛盾をはらんだ「現在」を強く意識し
ていたように思われる。ある意味で「連続」するもの（たとえば、矛盾）を引き受けながら、

⁷³ 同上、290頁。

⁷⁴ 『神戸とYMCA百年』神戸YMCA、1987年、272頁。

⁷⁵ 同上。

⁷⁶ 同上、275頁。

⁷⁷ 同上、283～284頁。

いまをどう生きるかが問われた。80年代の評価には「断絶」がみえる。そうではない者の立場から、客観的で妥当、矛盾を容れない白黒明白な評価を導き出すことが出来た、といえるように思われる。

4. まとめ

60年代初頭には、当事者並びに直近の者が「大陸事業」当時における願いや思いを表明した。60年代半ばから70年代にかけ、枠組みからとらえ見直す機運が起り、当事者の思いと矛盾したが、それは当時における「現在」の矛盾や問いにつながるものでもあった。そうした議論は80年代には、客観的評価へと収束し落ち着いた。

このように戦時評価の戦後史をたどるとき、いまふたたび「現在」を問い質すことが必要なのか、と強く思われてならない。60～70年度の矛盾と80年代の客観的評価の双方に内在しつつ、戦前・戦中のキリスト教界、またYMCAなど諸団体の動きを、自身の現在において再解釈、再構築しなければならないだろう。

5. おわりに —— 当面の（仮）結論と今後の課題 ——

筆者の「大陸事業」研究は道半ばで本稿もその一里塚であり、その意味で本稿の結論も当面の（仮）結論といわせていただかねばならない。

5-1. 歴史の評価にかんして

この項では、作業をとおして再確認した、筆者自身の方法論の一端について述べる。

後ろ(過去)を検証していると、似たものが前からやって来ていることに、いやあるいはむしろすでに足もとを浸していることに、気づかされることがある。過去（歴史）の評価がそのまま現在の評価にはね返る、といわれる所以である。歴史とは意識的、ないし無意識的のいずれにせよ、現在をいいあらわす作業であると痛感する瞬間である。

プログラム・サイクルというものがある。計画→実施→評価、→計画→実施→評価、これを繰り返しつつけることがそれであるが、このサイクルにおいて、評価とは次を生んでいく基盤となるものでなければならない。いっぽう、このサイクルを繰り返しつつけるとき、徐々に、そして年数をへることで大きく、それと気づかず当初のサイクルとはちがう地点へ進んでいることがあるかもしれない。そうならずとも、最初のサイクルで深く検討されたことが忘れられ、表面的継承に陥り、サイクルが形骸化してしまっていることがあるかもしれない。ゆえに、折りにふれサイクルの全体を通観し、総合的に検証し直してゆく必要が出てくるのではないだろうか。

いま「大陸事業」の「評価」をみてきたが、この作業もこうしたサイクルの一環でなければならない。「サイクル」を「歴史」に置き換えれば、次のようにいえるだろう。過去を「歴史」とするための最大要件は、「過去を評定する」ことではなく、そのことを含みながらも「現在を問い質す」ことにこそ、むしろその中心的意義がおかれるべきではないか。そしてそれが「次を生きる」ことに、つながらねばならない。少なくとも筆者は、そのために「大陸事業」や、その遂行者ら、またのちの評価者から、歴史的な問い質しを聞こうとして

きたつもりであった。とくに60～70年代に問われたことは「現在」、そしてその先であったのである。当時における「その先」とは、われわれが生きているわれわれの「現在」につながっており、当時の問いはわれわれの「現在」においてもなお、生きているものなのである。

こう考えたとき、教団の「戦責告白」には「明日の教団」模索のあとを見ることができ、YMCAでは「次のプログラムで語る」とされたことは、ゆえのないことではなかった。その意味では、キリスト者たちの戦時下を問責することよりはむしろ、その仔細を顕わにしようとする作業、その遠い声を聞きとろうとする作業に徹し、それらがわれわれの現在をかれらが逆にどのように問い質してくるのか、謙虚に受けとめるべきときではないのだろうか。

「現在」が「戦時下」を問うという方向ではなく、むしろわれわれの「現在」が「戦時下」からの問い質しを受けている。筆者の「大陸事業」の「評価」は、そのようなものとしなければならない——とくに2010年代の現在においては——と考えるのである。

5－2. 60～70年代を中心とした「大陸事業」評価をとおして

このたびの検証をとおして、われわれがいま手にしている戦時下の日本YMCA、そして「大陸事業」にたいする評価の、よって来たとする主要論点とその幅が明らかとなり、現在につづる課題もあることが示されたように思う。それは、筆者にとってはとりわけ連続・断続・あるいは断絶といった言葉によって、端的に表現される事柄であった。その意味とはじつは、われわれは本質的に過去を断絶することは出来ないのであり、その意味で戦時の日本YMCAの人々を、筆者は他者として扱うことが出来ない、ということである。われわれは他者にはなりえないはずではないか。逆にそうであるからこそ、この歴史を評価することの意義は大きい、と筆者には思われてくる。なぜならわれわれが、戦時下を生きたかれらの他者でないからこそ、その評価が「われわれの現在」を問い質し、評価することに直結してくる事柄となるからである。

5－3. 今後の課題

しかしながら「評価」には「他者」による視点が欠かせないことも、『YMCA』誌上座談会、そして末包の混乱などから、確認した。では現在のわれわれが、自らの他者性を前提に戦時の日本YMCAの人々を他者としてとり扱うことを不可というとき（たとえば末包の矛盾と混乱を、現在われわれの問題として引き受けようとするとき）、日本YMCA「大陸事業」における他者とは、だれのことになるだろうか。それは事業の宛先となった中国の人々、とりわけ中国YMCAであり、いっぽうの相手方であった在中国の欧米系YMCAや宣教師たちであるだろう。本稿では、かれらによる「評価」をとりあげえていない。またこれまでの先行研究や言及においても、ごく少数のものを除き日本人主事の「証言」にたより、相手方の評価をいわば「また聞き」の形で伝えるものが大半で、一次史料の乏しいことが課題であった。

筆者は2014年秋、ミネソタ州立大学にあるYMCAアーカイブスを訪ねた。そこで米国目線からの新史料、さらには米国を經由した戦時下中国YMCAによる新史料を、多く発掘す

ることが出来た。それらを用いながら、他者からみた新たな諸側面を加えた「大陸事業」の再構築と、さらに他者からの評価を読みといてゆこうとしている。次回研究報告では、その成果を示したいと考えている。

(えんどう・ひろし 同志社大学大学院博士後期課程)